

教育者、斎藤喜博

明治44（1911）年、群馬県佐波郡芝根村川井（現在の玉村町）生まれ。
群馬県師範学校（群馬大学の前身）卒業後、昭和5（1930）年に、当時教育研究が盛んだった玉村小学校で教師としてのキャリアをスタートさせた。戦時下の厳しい社会情勢のなかにおいても独自の教育観を育くみ、30歳にして『教室愛』を出版した。

その後、芝根小学校、玉村中学校、県教組を経て、昭和27（1952）年に41歳の若さで佐波郡**島村小学校**の校長に着任。以来11年間、「子どもの持っている無限の可能性」を引き出し、高めることこそ、「教師の仕事」であり、教材研究によって教育技術を教師自身が高めることは子どもの学習意欲と基礎学力を高めることにつながると説き、斎藤校長のもと授業研究も頻繁に行われた。また、基礎学力とともに合唱や舞踏、演劇、体育を通じて子どもや教師の創造性を高めることも重視された。

独創的な教育実践は「**島小教育**」と呼ばれ、ドキュメンタリー映画や写真集、合唱レコードなどが作られるなど、全国的に注目を集めた。島小の公開研究会は11年間に8回開催され、全国からのべ1万人の教師や研究者、行政関係者、ジャーナリスト、芸術家などが参加したと言われている。

昭和37（1962）年5月に取材のため島小を訪れた大江健三郎は、「未来につながる教室」と題するルポタージュを発表し、島小教育を絶賛した。（「文芸春秋」昭和37年7月号に発表、後に著書『厳格な綱渡り』に収録）

その後、昭和38（1963）年に境東小学校、昭和39年（1964）年からは大規模校の境小学校で5年間校長を務め、島小の教育実践をさらに展開していった。

昭和41年発行の「教育事典」（小学館）には「**島小方式**」という項目が収録されており、「全国的な影響力を与えた」と結ばれている。

昭和44（1969）年に定年退職後、佐賀大学、岡山大学、大分大学等の非常勤講師や宮城教育大学の専任教授を務め教員養成教育に携わるほか、「教授学研究の会」を主宰して、子供の可能性を引き出す教授学を築き上げることに全力を注いだ。
また、校長時代から全国各地で継続的に教育研究や実践指導、講演などに奔走してきたが、病に倒れ、昭和56（1981）年、高崎にて70歳で死去。

卒業式の「呼びかけ」形式は、斎藤校長の発案により昭和30年3月に島小学校で始まったものとしてNHK「チコちゃんに叱られる」でも紹介された。

強固に教育改革を進める中で、強力な信望者とともに反発者も生み出し、教師人生は長い戦いでもあった。

歌人、斎藤喜博

歌人、斎藤喜博

島小教育で全国に知られた教育者・斎藤喜博（1911- 1981）は、土屋文明門下、アララギ派の歌人でもある。

短歌誌『アララギ』、『ケノクニ』などで約半世紀にわたって活躍したほか、1951（昭和26）年に第一歌集『羊歯』、1953（昭和28）年に第二歌集『證』、1961年に第三歌集『職場』を発表した。

土屋文明と喜博 ①

土屋文明（1890 - 1990）を敬愛し私淑していた喜博が、正岡子規－伊藤左千夫に連なる短歌結社、憧れの文明が編集発行人を務める『アララギ』の同人となったのは1932（昭和7）年、19歳のことだった。

その後、1939（昭和14）年には茂吉・文明の上野三碑万葉踏査に同行するなど、喜博は師とのきずなを深めていくが、さらにそれが強固なものになったのは、1945（昭和20）年、東京大空襲によって青山にあった自宅を焼失した文明が、群馬県（吾妻郡原町川戸。現東吾妻町）に疎開してきたことが大きいとされている。当時文明は、アララギの地方誌の発刊を強く望んでおり、群馬でそれに応えたのが喜博だった。

群馬県でアララギ地方誌『ケノクニ』が創刊されたのは1946年6月。発行責任者は喜博、その人である。

歌人、斎藤喜博

土屋文明と喜博 ②

『ケノクニ』が他のアララギ地方誌と大きく異なっていたのは、本誌アララギを率いる土屋文明が自らの歌を寄せ、選にも関わったことが挙げられる。それは生涯を通じて文明ひとりを師と仰ぎ文明に選ばれた歌以外は発表を控えるという態度を貫いた喜博にとって望外の喜びであり、誇りに感じるどころだったに違いない。

喜博の二男と二女の名は、「禾秀」「秋津」というが、いずれも文明の命名によるもの。長男国太も大学入学に際しての保証人を文明に請うているなど、喜博は一家で文明と深いつながりを保ち続けた。

喜博は文明について「君が歩み吾に見えねどすがる如く學び來りし十幾年か」と畏敬を込めて詠み、『職場』の巻末小記にも「私は今まで先生から、短歌ばかりでなく、生活や仕事のすべてにわたって、その根源的なものを學んできた…」と書いた。また晩年、自身が肝臓を患って入院した折には、「君が選受けてつたなく歌つくり過ぎし四十五年を病めば思ほゆ」と、自らの歌業を顧みながら、文明への感謝を詠っている。

喜博は、病床でも作歌、選歌を続けたが、1981（昭和56）年7月24日に入院先の高崎の病院で、その70年の生涯を閉じた。三回忌の1983（昭和58）年には、昭和46年以降の歌を収めた遺歌集が発行されたが、この歌集の題、『草と木と人間と』も土屋文明によるものである。

土屋文明と喜博 ③

文明と喜博との関係は、ケノクニ同人の堀江厚一がまとめた『喜博と文明（1955 石川書房）』に詳しい。堀江は兩人の作歌を時代ごとに並置させる形で対比を試みている。

このほか、両者の関係を扱ったものに、監物昌美の『文明・喜博に学ぶ』（1995 年近代文藝社刊）などがある。

また、平成11年に県立土屋文明記念文学館で開催された企画展「土屋文明と斎藤喜博」の図録は、関連資料、特に写真資料が豊富である。

※ 文中、敬称は略させていただきました。